

書 評

Gerard Delanty: *Community*

London: Routledge, 2003. ix+227

森 祐司

Raymond Williams は *Culture and Society* (1958) の中で「コミュニケーション理論はコミュニティー理論である」(313) と言った。当たり前のことのように聞こえるこの発言は「コミュニケーションは伝達ということだけではなく、受容であり反応のことでもある」(313) というこれまた当たり前のような事実にもとづく。それぞれの時代の感情構造を小説に読み取りながら 20 世紀中葉の自分の時代を考えたウィリアムズにとって、文学作品を書き又読むという行為は「大衆のコミュニケーション」(mass-communication) 以外の何ものでもない。この本は「コミュニティー」の概念史と言ってよい。

ここで紹介するデランティーの『コミュニティー』は、人文・社会科学の様々な学問分野にまたがるコミュニティー概念を整理、概説したまことに有難い参考書である。「コミュニティー研究」がひとつの研究領域として成立するのであれば、本書はまちがいなく必読書リストに名を連ねるであろう。そして、文学がコミュニケーションの問題である限り、文学を研究するものにとっても役に立つ知識を与えてくれる書物である。

本書は The Open University で教鞭をとる社会学者 Peter Hamilton をシリーズ編集者とする社会学の鍵概念を扱った “Key Ideas” というシリーズ物の 1 冊で

ある。“Key Sociologists”というシリーズの姉妹編として刊行されている Routledge ならではの啓蒙書だ。本書以外には *Citizenship, Class, Consumption, Culture, Globalization, Lifestyle, Mass Media, Moral Panics, Old Age, Postmodernity, Racism, Risk, Sexuality, Social Capital, The Virtual*, といったタイトルの本がリストに上がっている。

著者のデランティーは1960年生まれの社会学者。近年理論に関する著作を次々と発表している。リバプール大学の社会学教授で、自身で書いた詳しいホームページがあるので参照されたい。(http://www.liv.ac.uk/sspsw/staff/biogs/delanty.htm) 本書を読む限り、少々雑なところはあるけれども、要点を掴み整理して記述する能力には脱帽である。

本書ではコミュニティ概念はコミュニケーションの過程で人間の意識の中で構築される流動的な概念として捉えられている。それは、すでにある制度として帰属を余儀なくされる社会集団をさすのではなく、人間の意志によって生み出すことが可能であるような人間集団なのだ。明言されてはいないが、社会学、心理学、教育学等の分野で流行りの、ちょっと胡散臭いが“(social) constructionism”の視点で書かれていると言え、その筋の方にはわかりやすいかもしれない。著者は「社会」(“society”)「国家」(the “state”)という概念をとりあえず既成の「現状」(status quo)を表す言葉として定義し、中心になるのは近代以降のコミュニティ概念であるが、とりあえずギリシャ・ローマ時代からの「コミュニティ」を「コミュニケーション」「帰属意識」というキーワードをもとに概観している。一言でいえば、近代において失われたコミュニティ意識がポストモダンの時代に蘇る様を歴史を追って記述したということになる。まことの確な現状把握にもとづくコミュニティ論だと思う。

理論・方法論的な拠り所としては、人工的構築物として「コミュニティ」を考えるという意味でCohen (1985), コミュニケーションとコミュニティの問題に関してはHabermas (1989 他), 意識の問題はAnderson (1983)に多くを負っているようだ。社会学、文化人類学の分野でのコミュニティ研究の学史という点では、Ferdinand Tönnies, Max Weber, Robert Nisbet, Émile Durkheim, Victor Turner といった「古典」から、Alberto Melucci, Manuel Castells, Craig Calhoun

などの新しい学説まで幅広く解説してある。このあたりについては不案内な私にとってまことに有難い資料となった。(本書には網羅的な文献リストがついているのでそちらを参照していただきたい)

本書の主眼は、ちょうど真中あたりの第6章で紹介されるハーバーマス等による「コミュニティー批判」を受けて、7, 8, 9章でそれぞれ概観される“Postmodern community” “Cosmopolitan community” “Virtual Community” と命名された20世紀後半から21世紀へと続く「コミュニティー」のあり方を理論化しようとするところにある。ただでさえ大雑把な概説をさらにまとめて言えば、コミュニケーションにもとづくコミュニティー形成では、伝統的コミュニティー(従来の宗教共同体や国家)や倫理・道徳などのような共通の価値観で結ばれる「共同体主義」(communitarianism)のような意識ではなく、刹那的とも言える「集合的目的」(“collective goal”)による「動員」(“mobilization”)にもとづく集団形成が中心となる、ということになろう。ポストモダンなコミュニティーとしては“New Age travellers”(トレーラーやキャンピング・カーでイギリス各地を浮浪する根無し草の集団), コスモポリタンなコミュニティーとしては各種草の根運動などのグループを想像すればよい。バーチャル・コミュニティーには説明はいるまい。共通の特徴は付かず離れずの流動性と一見矛盾する強い目的意識である。

本書の結論では、「土地への執着」といった具体的帰属意識にもとづく伝統的なコミュニティー意識にあるユートピア的ノスタルジーを否定しつつも、アンダーソンの言う「想像された」(“imagined”)コミュニティーという発想や Castoriadis (1987) の社会形成における「想像的」(“imaginary”)力を援用することで、新たな「帰属意識」(アイデンティティー)にもとづくコミュニティー形成の可能性を示唆している。ただし、これもユートピア的であることに変わりはない。

最後に、本書の問題点に触れておきたい。私は、「コミュニティー」について考えるときにはウィリアムズの書いたものを真剣に取り上げる必要があると思っている。本書では、*Culture and Society* と *Key Words* (1976) に1度ずつ簡単に触れられているが、できれば、他の著作、*The Country and the City* (1973) などにも触れて欲しかった。この本も重要なコミュニティー論である。「集合的意

識」(“collective consciousness”)という問題(230-32)やパースペクティブに関わる「ノスタルジー」について(9-12)きつと深い洞察が得られたであろう。コミュニケーションとはもっとどろどろとしたものであることを考慮できたかもしれない。(森,「コミュニティー意識について」4-6「ルールづくりとアウトドア」297を参照)

ディアスポラ体験は複合的コミュニティー意識について重要な示唆を与えてくれるはずだ。Stuart Hallの「アフリカ」「アメリカ」「ヨーロッパ」にまたがる黒人としての複合的「アイデンティティー」についての議論(例えばHall, 1990)やPaul Gilroyの“race”概念や“double consciousness”という意識(Gilroy, 1987, 1993)については、それなりの考察が必要だと思う。概説書という性格上、説明が簡略化されるのはやむをえないこと(158-59)ではあるが、名前に触れるのみで引用はおろか参考文献にも挙げられていないのはどうであろうか。私が判断できる限りで言えば、例えば比較的個別の問題を扱っている“New Age travellers”についてのKevin Hetheringtonの研究書(Hetherington, 2000)への詳しい解説(145-47)と比べてみても、物足らなさを感じざるを得ない。

もうひとつ。単純な編集上のミスであればいいのであるが、最初にアンダーソンの本が紹介される際、「想像の」が“imaginary”になってしまっている(3)。残念である。このページでの言及については「索引」にも載っておらず、あとで詳しく議論しているところ(170, 190)では正しく“imagined”となっているので、単純ミスと考えたい。文献リストの方も直しておくべきであろう。ただし、私は、アンダーソンの“imagined”にこもった(国民によって)「想像された」という受身的意味合いが重要だと思っており(森,「共同体とリーダーシップ」316)、また、カストリアティスの「想像」(“imaginary”)は「表象・代弁」(“representation”)との関わりで考えるべきではないかと考えているので、このミス・混同は許しがたい点でもある。

参考文献

Anderson, Benedict. *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*.

London: Verso, 1983.

Castoriadis, Cornelius. *The Imaginary Institution of Society*. Cambridge: Polity, 1987.

Cohen, Anthony P. *The Symbolic Construction of Community*. London: Tavistock, 1985.

Gilroy, Paul. *'There Ain't No Black in the Union Jack': The Cultural Politics of Race and Nation*. Chicago: U. of Chicago P, 1987.

———. *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*. Cambridge: Harvard U. P., 1993.

Habermas, Jürgen. *The Structural Transformation of the Public Sphere*. Cambridge: Polity, 1989.

Hall, Stuart. "Cultural Identity and Diaspora." *Identity: Community, Culture, Difference*. Ed. Jonathan Rutherford. London: Lawrence, 1990, 222-37.

Hetherington, Kevin. *New Age Travellers: Vanloads of Uproarious Humanity*. London: Continuum, 2000.

森 祐司「ルールづくりとアウトドアー生き方の問題としての野外学習一」『言語文化研究』26号 大阪大学言語文化部, 2000, 295-315.

———「共同体とリーダーシップ—コミュニケーションに基づく言語文化研究一」『言語文化研究』27号 大阪大学言語文化部, 2001, 303-22.

———「コミュニティ—意識について」木村茂雄他『カルチュラル・スタディーズの理論と実践』(言語文化共同研究プロジェクト2000)大阪大学言語文化部・言語文化研究科, 2001, 3-14.

Williams, Raymond. *Culture and Society: 1780-1950*. New York: Columbia U. P., 1983.

———. *The Country and the City*. New York: Oxford U. P., 1973.

———. *Key Words: A Vocabulary of Culture and Society*. London: Penguin, 1976.